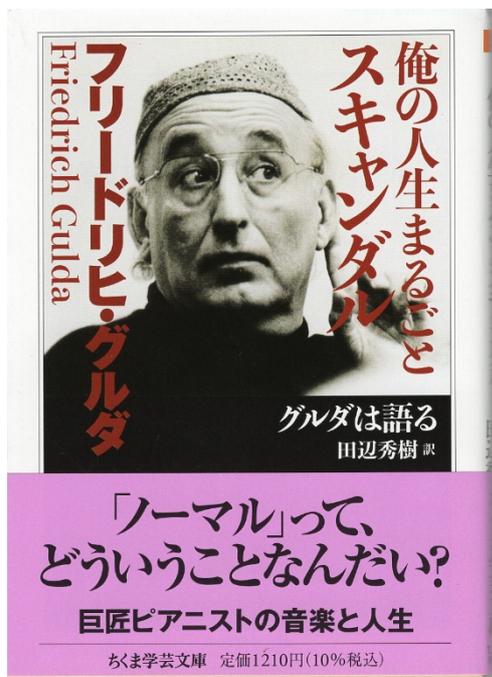


グルダ『俺の人生まるごとスキャンダル』ちくま学芸文庫、田辺秀樹訳 2023年：グルダのモーツァルト



## 1. 天才ピアニストの生き様

フリードリッヒ・グルダは、パドゥラ＝スコダ、イェルク・デムスと並んで、「ウィーンの三羽ガラス」と呼ばれたピアニストです。パドゥラ＝スコダは、シューベルトのピアノソナタの全集をはじめ主に古典音楽に大量の録音を残しています。デムスは、古楽器の演奏や声楽の伴奏など室内楽を得意とし、その方面で数々の録音を残しています。二人とも素晴らしいピアニストですが、残りの一羽のカラスであるグルダは、クラシックのピアニストという枠組みにおさまらない魅力的な音楽家です。

この本は『グルダの真実』という題名で、かれこれ30年ほど前に単行本で出版されていたのですが、最近『俺の人生まるごとスキャンダル』という

題名で、ちくま学芸文庫から再版されました。原書の題名を素直に訳すと文庫本のとおりですが、あまりにも衝撃的な題名なので、単行本の時はあえて『グルダの真実』としたと、翻訳者の田辺さんは私に話してくれました。

やや露悪的な表現が散らばっているため、素直に楽しめない読者がいるかもしれません。しかしグルダという天才ピアニストの生き様が、誠に率直に語られています。単行本はすぐに絶版となっているので入手が困難です。しかし、再版された文庫本は新刊ですから、まだ容易に手に入るものと思います。興味のある方はぜひお読みください。

## 2. グルダの音楽の多様性

グルダは、若くして国際コンクールで優勝し、フランス音楽に優れた録音を残しています。彼は、すぐにジャズにのめりこみ、ニューヨークのジャズのメッカといわれるバードランドで、第一線のジャズメンとセッションをしています。その録音が残っていますので、聴いてみたいと思います。彼のすごいところは、クラシック奏者がジャズ風に演奏するというのではなく、クラシック奏者から離れて、ジャズ奏者になりきってジャズを演奏するところでしょう。私はジャズに詳しくないのですが、一聴に値する演奏だと思います。

ピアノ音楽の旧約聖書はバッハの「平均律ピアノ曲集」であり、新約聖書はベートーヴェンの32曲のピアノソナタだといわれています。グルダは両方とも全曲録音を残しています。

しかし彼がもっとも大事にしていたのは、モーツァルトの音楽でした。ところが、モーツァルトのピアノソナタやピアノ協奏曲の全集録音は残していません。

なぜでしょうか。本書の中で、モーツァルトのピアノソナタの全集を録音したが、その録音テープを破棄してしまったと告白しています。彼にとってモーツァルトは、もっとも大事だったがゆえに、十分に満足いくものを残せなかったというのが「グルダの真実」だったのではないのでしょうか。

### 3. 今回一緒に聴きたい曲

今回は、グルダ自身が作曲した作品と彼が演奏したモーツァルトの作品を中心に聴いていきます。モーツァルトの場合、正規録音もありますが、ライブ録音がたくさんのおつております。私もたくさん収集しましたが、彼の演奏は同じ曲であっても、一つとして同じ演奏はありません。この点は、ジャズと相通じるところであり、モーツァルトとジャズは「地続き」のところがあるといっても過言ではありません。グルダにとっては、演奏は一回性のものであり、それが「命をかけた音楽」であるということです。

このように考えると、ベートーヴェンやバッハで全曲録音できたのに、彼がもっとも重要だと思っているモーツァルトでは全集を作ることが出来なかったのがわかるような気がします。モーツァルトは誰が弾いても素敵な音楽ばかりですが、今回は格別なピアニストのグルダの演奏を楽しみましょう。

演奏予定曲目 すべてグルダの演奏

グルダ作曲「バードランドの子守歌」ジャズライブ録音より

グルダ作曲「アリア」：グルダのアリアとして大変有名な曲。モーツァルトが現代に蘇ったら書いていそうな曲です。

モーツァルト「ピアノソナタ イ長調 K331」より：大好きなベーゼンドルファーのピアノで練習用として残したテープからの録音

モーツァルト「ピアノ協奏曲 第21番 ハ長調」より：指揮者とソリストの関係が面白い。

グルダ「チェロ協奏曲」より：ハインリッヒ・シフと喧嘩別れした原因となった曲